

2012年 和本で見る書物史

## 第11回 和本の調べ方 書名や著者名の難しさ

はしぐち こうのすけ  
橋口 侯之介

和本入門 pppp103-150

### 和本を調べるための考え方(とくに江戸時代の版本)

これまでは、書物の装訂やその歴史について学んできた。江戸時代にピークを迎えるが、その書物づくりには古くからの「様式」というものがあった。今でも基本的な作法として残っているほどである。現代にも共通するもの、今とはまったく違うものなどさまざまな面が和本にある。そのひとつひとつを知ることだけでも本を深く知る楽しい世界が広がるのだが、そのためには少々の基礎知識を得ることが必要である。

これからは、実際に和本が、表紙がどうなっているのか、書名や著者名はどう書かれているのか、どういう構成になっているのか、いつの本なのか、といったことを実例で紹介することにする。しかし、実際に和本を手にしてみるととまどうばかりである。

その本が、誰が何を書き、いつ、どこで刊行されたか、を正確に調査すること。

それらを引き出すために、わたしは次の三つの**カテゴリー**で考えている。つまり、**基本情報**、**位置情報**、**個別情報**である。

**基本情報** 書名と著者名、成立年代(刊行年代とは違う)、分類などがまずその本の基本情報である。しかし、ひとつ書名を採るという作業だけでもなかなかやっかいなもので、そう簡単ではない。表紙についている題簽に印刷された題名を**外題**というが、それと本文の始まりに書かれる題名(**内題**という)が異なることが少なくなく、それをどう考えるのか難しい問題である。また、現代とは編著者の表記法などが違い、本に出ていることをそのまま受け取っても誰のことかさっぱり分からないことがある。これらをきちんと把握するのが基本情報である。

**位置情報** 手元にある本が、いつ初版が出て、最後出版されなくなるまでのあいだの、どの段階のものを調べるのが位置情報である。和本の場合は同じ書名の本でも、ひとつとして同じものがない。

**個別情報** その本固有の特徴を記しておくのが個別情報である。保存状態のよしあし。その本のもとの持ち主や来歴も大事である。以前の持ち主がいろいろと書き入れをした場合もある。とくに和本は中世以来、注釈などを本に書きいれて伝えてきた。その過程がわかることがあり、重要である。

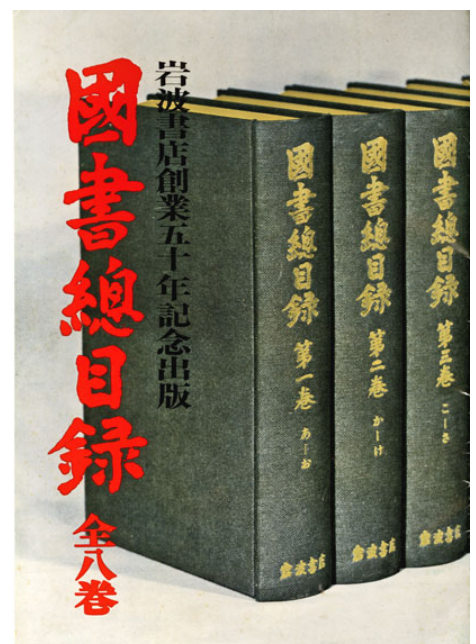
### 和本を調べる基本文献『国書総目録』

昭和38年から岩波書店が刊行した『国書総目録』は、江戸時代以前にできた本のうち図書館などで存在が確認されたもの約50万点を書名順にして目録化した。右がそのときのパンフレット。

8巻に索引を加えた全9冊である。書名・著者名・成立年代・巻数・所蔵機関名などがわかる。

通常目にするのできる本ならまず掲載されていて、調査に大変役立つ。

しかし、いくつか問題があった。「江戸時代以前にできた本」のうち日本人が編著者であることを条件としたので(それを国書と呼んだ)、日本で刊行された漢籍や仏典ははずされてしまった。

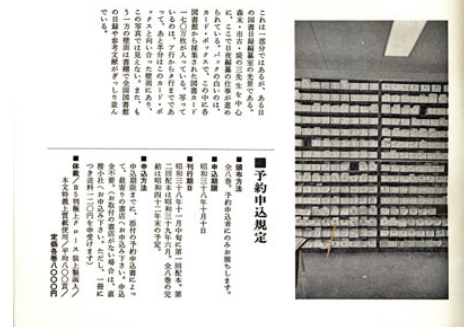


全国の図書館にあるが、その図書館が調べた「図書カード」だけですましてしまったので、正確でないものも含まれた。出版元の本屋名や本のサイズが入っていないので、まだ不十分である。

その欠点を後に改良した（まだ不十分だが）。現在はこの『国書総目録』の全データがデジタル化されて国文学研究資料館に移管され、インターネット「日本古典籍総合目録」として公開されている。



『国書総目録』のパンフレットから。編集部には全国図書館のカード一七〇万枚が備え付けられて作業したとある



### 基本情報

その「日本古典籍総合目録」で『柳湾漁唱』を調べて見る。まず書籍版の『国書総目録』と同じデータを示す。

「著作id」はこのデータベースの固有番号。

「統一書名」がいわゆる書名タイトルとその読み方である。これをあえて「統一」といっているところが重要。

「巻冊」は、全何巻で構成され、その構成の冊数が出ている。

「分類」は、日本古典籍独特の分け方に従う。

項目	内容
著作ID	532547
統一書名	柳湾漁唱 (りゅうわんぎょしょう), K, 1
巻冊	三集三冊
分類	漢詩
著者	館/機(館/柳湾)著 三雲/誥等編
成立年	文政四・二集天保二・三集同一二序
国書所在	【写】新潟県立図書館(明治写一冊), 宮城西小【版】国会, 国会鶴軒, 静嘉, 京大, 慶大斯道, 東大(一冊), 東北大狩野(一冊), 新潟県立図書館, 日比谷加賀(三集欠、二冊), 宮城今泉(一冊), 刈谷(三集欠、二冊), 長岡市立互尊文庫, 新津市立記念図書館, 神宮(三集欠、二冊), 茶園成篁(一冊), 茶園武藤(二集欠、二冊), 成田(二集欠、二冊), 延岡内藤家(一冊), 学書言志
著作種別	和古書

<input type="checkbox"/>	No.	書名, コレクション略称, 請求記号, 刊写の別, 刊年 or 書写年, 形態, 冊数, 残欠, 書誌種別, BID
<input type="checkbox"/>	1	柳湾漁唱, 国文研, ナ8-356-1~3, 刊, 3冊, W, 200009986
<input type="checkbox"/>	2	柳湾漁唱, 国文研日本漢詩文, 87-182, 刊, 1冊, 初集存, W, 200010323
<input type="checkbox"/>	3	柳湾漁唱/二集, 国文研日本漢詩文, 87-183, 刊, 1冊, 二集存, W, 200010324
<input type="checkbox"/>	4	柳湾漁唱三集, 国文研日本漢詩文, 87-184, 刊, 1冊, 三集存, W, 200010325
<input type="checkbox"/>	5	柳湾漁唱, 宮城県国今泉, I919. 5-1/1, 刊, 1冊, 23cm, K, 29175638

「著者」は、「館/機(館/柳湾)著、三雲/誥等編」となっている。

「成立年」は、この本が書かれた年代で、全3集それぞれの年代がわかる。

「国書所在」は、この本を所有している図書館などの名称。

「著作種別」は図書館用語。日本で出た「前近代」の書物ということ。和本とはいわないところが??

これを少し詳しく見たデータにしたのが、「日本古典籍総合目録」の部分で下図のようにした。

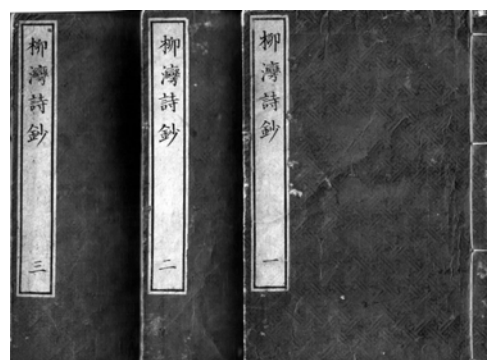
柳湾漁唱, K, 1, 漢詩, 館/機(館/柳湾)著, 文政四・二集天保二・三集同一二序, 15, 532547	
項目	内容
書誌ID	200009986
記載書名	柳湾漁唱(りゅうわんぎょしょう), 内 柳湾漁唱(りゅうわんぎょしょう), 尾 柳湾詩鈔(りゅうわんししやう), 見 柳湾詩鈔(りゅうわんししやう), 外 柳湾漁唱(りゅうわんぎょしょう), 序首 柳湾漁唱(りゅうわんぎょしょう), 柱
巻数	3集
刊写の別	刊
出版事項	萬笈閣(東京)
形態	21.2×13.6cm, 半, 3冊
書誌注記	〈刊〉出版事項は見返しによる, 版心に石香齋蔵とあり。〈伝〉(印記)「鴻山文庫」。
所蔵者	国文研, ナ8-356-1~3, W

ここでは、個別の所有者が調査した内容にしたがって、「記載書名」として複数の題が載る。

あらたに「出版事項」が加わり、刊行した出版元名が掲載されるようになった。

そのほか、『国書総目録』になかった「形態」も本のサイズを入れるようになった。

「書誌注記」というのは、図書館用語で、要するにその他の情報をここに書くようになる。



## 和本の構成

表紙、紺色で「題簽<sup>だいせん</sup>」がある。

「柳湾詩鈔 一」となっている。なくなってしまうことが多い。

見返し(あるいは扉、出版情報が入ることもある)

著者名「館枢卿先生著」とあり、「東京 万笈閣」が板元。

序(序とは、今の推薦文。作者自身が書くものと、他人の書いたものがある)

この本には、数名の序が入り、そこに「柳湾漁唱序」とある。

目次(目録)

場合によっては口絵、凡例や参考文献

ようやく本文の始まり＝ここが大事。巻頭<sup>かんとう</sup>という。

「柳湾漁唱」と題が書かれ、「越後 館枢卿氏 著」とある。

その後に、「倩 薩摩 三雲誥公 謹 同輯」などとある。

書名がいくつもある

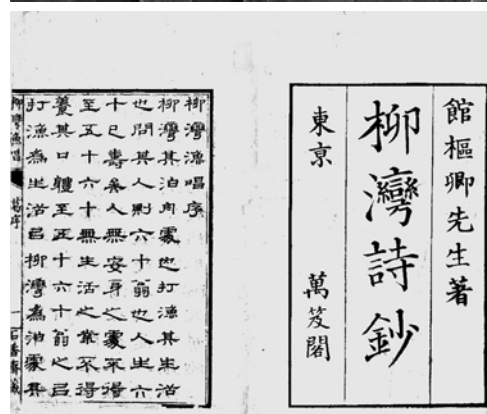
上記の国文研のデータでは

「柳湾漁唱, 内 柳湾漁唱, 尾 柳湾詩鈔, 見 柳湾詩鈔, 外……」などとある。

その意味は、巻頭に書かれた書名を内題(内)といい、巻末にもあれば尾題<sup>びたい</sup>といい、見返しの題(見)や表紙の題簽<sup>げだい</sup>の外題(外)などと区別してとっている。

いくつもあって、混乱するので基本的に巻頭題(内題)を採用する。

正式な書名は巻頭のものを採用する。その理由は『和本入門』参照。



この本は、『柳湾漁唱』という漢詩集である。

著者名

見返しには「館枢卿先生著」とあり、巻頭には「越後 館機枢卿氏 著」とあった。

『国書総目録』では「館／機（館／柳湾）著」としている。江戸時代より前の時代、人は多くの名を持っていた。また、年齢や職業にとってそれを替えることもあった。

この人の場合、「館（たち）」が姓である。「機（き）」が名。そのほかに〈字（あざな）〉があり「枢卿（すうけい）」といった。そのうえ「柳湾（りゅうわん）」という〈号〉もあった。ふだんは「雄二郎」と呼ばれていた。

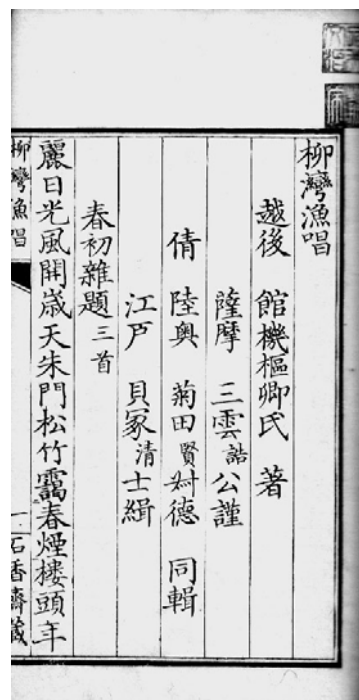
名はふつう元服すると正式に名付けられた。それまでは幼名で呼ばれていた。「機」がそのときの名である。本名である。しかし、正式に署名するときでない限り本名を呼ばないのが、古来の風習である。そのため普段は別に「雄二郎」にした。漢学を学んだ人は、師匠から別名をもらう。それが〈字〉で、目上のひとはこれで呼ぶ。

そのほかに絵や文を書くときなどはいわばペンネームとして〈号〉を用いる。葛飾北斎は、姓と号である。

本には、これらを配した書き方のルールがあった。

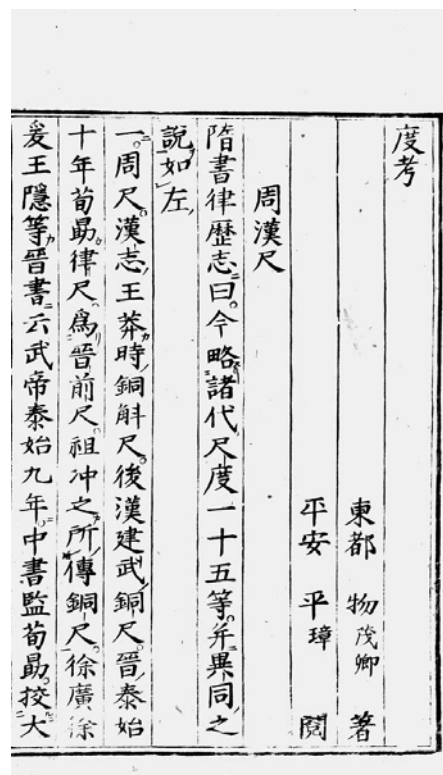
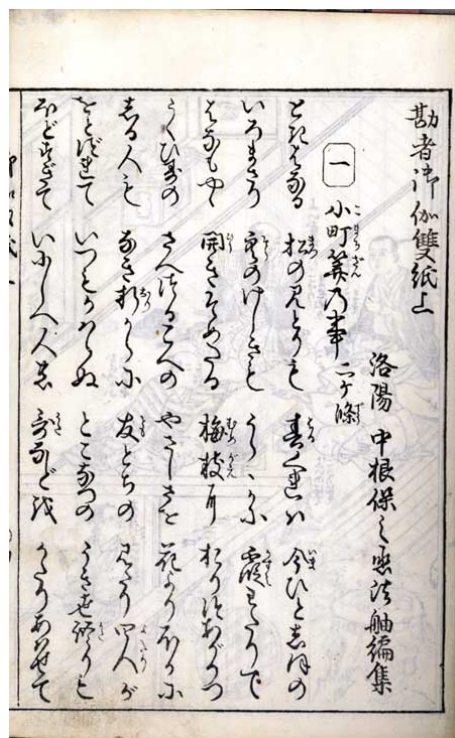
「本貫・号・姓・名・字」の順に書く。これは中国の伝統である。

本貫というのは、その人の出身地で中国では「県」単位、日本では「国」単位でいう。



さらに面倒な例。

右の画像の本は、ある有名な学者の著作であり、その監修（関）をした人物と左側の本の著者は同一人物である。著者の書き方の難しさがよく出ている。



『度量衡考』の巻頭